王女さまのリンガ

千夜詠

表紙イラスト：秋月からす

試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『王女さまのリンガ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

王女さまのリーガ

千夜詠
表紙／秋月からす

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ベレッタ

美麗で豊満な肉体を持った姫様。次期女王候補であり、剛毅なお方。男の性奴隷といえるリンガの所有が許されているが、これまでは気に入った相手がいなかった。

コルト

暗殺者として将来を有望視される天才。クールな美少年であるが、まだ色事に関する修行の前で、内面は純情。

森から狼の遠ぼえが聞こえてくるような満月の晩だった。

王都の中心より東の外れに、一つの城がある。人々からは白鳥の城と呼ばれるここは、純白の壁面を持った優美な佇まいを見せていた。

繁華街の酒場さえ静まり返った深夜、ただ一人、俊敏な獣のような動きでこの城に近づくものがあった。

城壁は高く、周囲の堀は深い。正面門の松明(たいまつ)の下に衛兵が二人いたが、彼は疾風となってその脇をすり抜けた。

ブルッと一度二人は身震いをしたが、気づきはしない。侵入者は既に場内の見回りの注意をかわして一気に二階、三階と外壁から飛び移り、そして刹那のうちに最上階に辿り着いた。

(時期女王の居城とはいえ、警備は大したことはないな……)

体に張りつくような黒ずくめの衣装を身につけた少年は、目的の場所を窓から覗き込んでいる。

あと数分も経たずに、この国の未来が大きく変わる。暗殺者として天賦の才を持った彼、コルトが仕損じることなど万が一にもないのだ。

初夏の穏やかな風と共に、少年は姫君の寝室に入り込んだ。

月明かりに照らされた彼はまだ年若く、童顔である。黄金色の少しだけ癖のある金髪を

した線の細い美少年に見えた。だが眼光は研ぎ澄ました刃そのもの。黒豹のようなしなやかさを持って、気配を断ち、殺気すら微塵も出さぬほど至極冷静に冷酷に、ベッドに眠るターゲットに近づいた。

「貴女(あなた)に怨みはありませんが……、これが我らの生業なのです。穏やかなる永眠を……」

横を向いて眠る王女を見下ろしながら、腰の短刀を抜いていく。

姫君が寝返りを打って仰向けになる。そこに心臓に一突き……のはずだった。

「な……っ、なんて……」

神秘を携えた湖のような青銀の、豊かな腰まである長い髪だった。それ自体が淡い光を放つように艶やかで、そこからほんのりと甘い良い匂いが香ってくる。

(美しい……)

整った顔立ちというだけではない。気位が高そうで、慈愛が滲み、爽やかで濃厚な色香が絶妙に混ざり合っている。最上級の賛辞さえ物足りなく思えるような眠れる美女。

見蕩れて時間が止まった。

ただ精密に淡々と仕事をこなす暗殺者に感情が芽生えた瞬間だった。

「ん……っ、んん……」

両手を頭上にあげるようにして彼女は薄く瞳を開いていく。

まずい。悲鳴をあげさせることなく、今すぐ喉元を掻き切るのだ。

王女は上半身を起き上がらせていく。
初めての仕事の時でさえ覚えなかった焦りを感じ、少年は短刀を握り直した。
その時、掛け布が彼女の胸元からハラリと落ちる。
「うっ！　あ、ああ……」
それは見事に熟した肉の果実であった。透けるような紫のベビードールを内から、はちきれんばかりに至極柔らかそうな脂肪の双球が盛り上げている。手の平では半分も覆うことのできないような女の象徴の頂にいやらしく突起した形状が見えて、ぷるんと弾力を誇る揺れと共に微かに上下した。
括れ、程よく柔肉のついた腰周りで、可愛らしい臍が覗けている。その辺りから濃い牝の麝香が放たれ、彼女の肉体からの熱気が少年の股間を直撃してきた。
（な、何だ、この感じ……何かの魔法？　いや呪いか？）
ピタリとした黒装束の脚部の合間が盛り上がってくる。
コルトは彼の所属する暗殺者集団の中でも特に期待のかけられた気鋭の存在だった。幼少より技術を磨き上げ、心身ともに完璧なアサシンのはずである。だが、それゆえに周囲の年長者らは彼に女を教えるのを忘れていた。
「ん……、誰……？」
まだ眠そうに半分しか開いていない王女の瞳。エメラルドのような碧眼である。

僅かにたじろぎ、額に汗を滲ませだした少年をまだ半覚醒状態で見詰めていたが、ハッとしたように完全に開かれた。
「お前……何者であるか？」
侵入者に悲鳴をあげることもなく、微塵も怯える気配なく、王女は問うてきた。
「こ、これから死に逝く者に名乗る必要はない」
「ふうん、暗殺者ってわけ……。残念ね、夜這いなら、少し可愛がってあげても良かったのだけど……」
「か、可愛がるぅっ！　な、な……」
動揺というものを初めてした気がする。
落ち着け。お城暮らしの姫に我が刃が届かぬはずはなく、絶対的にこちらがチェックメイトしている状況に変わりはないのだ。
王女はベッドから立ち上がる。
満月の光が幻想的に彼女の肢体を映しだした。
健康的でありながら新雪のような白い肌である。ベビードールは下腹部にいくにしたがって開き、むっちりとした太股も、鼠蹊部の周辺も丸見えだ。そこにあるのは紫色に統一された紐ショーツで、柔かそうな布地が湿気を多分に含んでいるように思える。小さく頼りなく女の本体を包んだ薄布から、染み込んだ甘酸っぱい牝の臭気が放たれてくるようで、

少年の男の本能と興味が視線を集中させてしまう。
「ははん……」
何かを悟ったように微笑むと王女は壁掛けてあったショートソードを手に取った。
「一勝負、といきましょうか」
「く……っ」
舐められている、と思ったのは刹那。剣を構えた王女から隙が消え、だがまるで殺意というものを感じない。無想のように佇み、波紋のような静かな気がこちらに届いてくる。
(舐めていたのは、こちらか……)
初撃が命運を別けるだろう。十分、二十分と対峙したまま二人は微動だにしなかった。
そして、僅かな王女の手首の動きを見切った瞬間、コルトは気の綻びに向けて駆けた。
シュン！　短刀の閃光が彼女の喉元に届くかというその直前、
「あ……っ」
王女のショーツが床に落ちた。
取り戻していた集中力が途切れ、視線が勝手にそちらを追う。熱帯雨林のような蒸れた茂みが見えた。
「隙あり」
短刀がショートソードに弾かれる。飛び込んだ勢いのまま床に倒れ込んで、仰向けから

体勢を戻そうとした時には、王女の切先が眼前にあった。
「うっ……」
「下着の紐が緩んでいて助かったわ。どうやら私の勝ちのようね」
見下ろしてくる彼女は、透けるようなベビードール一枚だけの姿で、女の恥部はもはや何物にも覆われていない。少年は顔が燃えるように熱くなるのを感じながら視線を背けた。相手を見ていなければ形勢を逆転する機会を見つけることもできないというのに。
「衛兵に突き出すか？」
「こんな恰好で誰か呼べると思って」
「じゃあ、ここで殺すか」
「そうね……」
しばらく考えるように王女は言葉を断った。生命の窮地であるというのに、直ぐ近くに剥き出しの女そのものがあると意識しただけで、硬直した男性は萎えるどころか脈打ち痙攣さえしそうだ。とても熱い視線がそこに注がれているような気がしてならない。
「貴方、可愛い顔をして、なかなか立派なものを持ってるじゃない。それに腕も立つ」
「ふあ……っ！　な、なにを……」
王女の素足が強張りに押しつけられてくる。グリッと軽く踏まれると、とうとう肉棒はピクピクと悦びの反応を示してしまった。

「女を知らないのね、貴方……。そうでしょ？」
「そ、それがどうした？」
足の裏が巧みに少年の男性自身の形状を確認していた。からかうように、弄ぶように、カリ首の周辺を擦られる。黒装束の内側で鈴口からカウパーがぬちゃぬちゃと漏れていった。
「いいわ、貴方……。とても、濡れるわ」
「な、なんの、ことだ……」
「気に入った、と言っているのよ。貴方、私のリンガになりなさい」
コルトは驚いて一度王女に視線を向ける。彼女の愉悦するような表情の途中に、濃厚な牝の熱気と煮詰めた乳製品のような香りを放った女陰があった。ただそこの全容は魅惑の濃青の園と闇影によって隠されたままだ。
リンガ。それは男の性奴隷のことである。王族や貴族のような高貴な女性にのみ許され、絶対の服従の元、彼女らの性的な快楽の奉仕玩具だ。
「ふざけるな！　どこまで俺を愚弄する。それに、お前を殺そうとしているのだぞ。うっ、はあ……っ」
優しく素足でズリ擦られ続けている。時折、きつく圧迫されると、生まれてこのかた初めて覚える快感が湧いてしまう。

「酔狂ではないのよ。リンガなど持つつもりはなかったのだけど、貴方を見て気が変わったわ。まあ、よく考えてごらんなさい。貴方には常に私の傍にいることを許す。どう、美味しい話でしょ。隙あらば、いつでも寝首を掻けばいいわ」

確かに悪い話ではない。断ればその場でこの命はない。それ自体は構わない。いつでも覚悟はできていた。だが、完璧な仕事を誇りとしてきたコルトの所属する暗殺団の名誉としてはこんな失敗は致命的だ。

「い、いいだろう。だが覚えておけ。俺は、お前に忠誠など……。うわっ、や、やめ……」

張りが強く、絶妙な柔らかさを持った足の裏が激しく少年の股間を扱(しご)きたててくる。

「我が名はベレッタ。この国の第一王女にして女王の正統後継者。貴方の名は？」

「コ、コルト……だ。くっ、あああっ、糞、糞ぉっ！　絶対にこの屈辱、晴らして……、ふあっ！　あああああ！」

小悪魔の微笑みを受けながら、天才暗殺者の少年は身悶え咆哮をあげていた。

＊＊

きまぐれに街で拾ってきた平民の美少年。そうコルトは紹介された。

まさか自分を狙った暗殺者であると告げるわけにもいかないのだろう。ただ驚いたのは、

この城の連中が同等以上の立場として扱ってくることだ。そこで初めて知ったのは、王女のリンガともなれば、騎士に相当する位が与えられるということだった。

汚れ一つない真っ白なシャツに、濃緑色の、これも真新しいズボンが与えられる。帯刀すら許され、無防備なベレッタ王女の態度には隙を窺うのも忘れてしまうほど拍子抜けだった。

「何を考えている？」

王都を望むベランダで二人きりのお茶の時間にそう訪ねた。

「別に……。ここでは私の居心地のいいように好きなように振る舞うだけ……」

コルセットで腰をきつく締め上げた野苺のような赤いドレスを纏い、長く豊かな髪を銀の装飾で後頭部で結わえているベレッタ。気品と優雅さに溢れながら、切れ長の瞳と紅桃色の唇からは妖艶さを漂わせている。自信に満ち、威風堂々とした風格も感じさせられた。

「俺の雇い主のことも聞かないのだな」

周りに人がいれば忠誠の態度を取り、二人きりになると不遜を通していた。

「まあ、察しはついてるし、ね……」

「そうか……」

この国には四人の王女がいる。彼女らは王城から離れ、都の東西南北にそれぞれ居を構えていた。数百年来の仕来りである。王女達はそこで一国の王として振る舞う為の実践訓

（あ、あと少し……、ほんの少しで、お、女の……ベレッタ王女の、そう、オマ〇コ……っ）
彼女の股内側はとても蒸れている。浴場からとは違う熱さと湿り気だ。
指先が脚部の付け根のラインに触れる。もっと近くで見たい。触れてみたい。
膨張する欲望が爆発しそうになったその時、
「そこまでよ、コルト」
静かに有無を言わせぬ意思の篭った命令が下った。
「……わ、分かってる」
切なさに胸が引き裂かれそうになる。まただ。爪の先程もない距離に欲して堪らぬ、知りたくてしかたがない、牝の本性があるのに、彼の主人は許してくれない。
（糞、糞、糞ォっ！　こんな女に、ハア、ハア、気持ちを乱されて……。ああ、見たい、もっと、もっと、もっと……）
桶で湯を掬って、ベレッタの体に付いた泡を流す。直接肢体を舐めていく液体にすら嫉妬しそうだった。
これで終わりか。残念に思っている自分が腹立たしい。
（リンガとは、もっと直接いやらしいことをするものだと聞いていたのに……。な、何を！
俺は暗殺者だ。こ、こんなことしたいだなんて……）
王女は立ち上がる。このまま湯にでも浸かるのかと思うと、こちらを向いて命令を下した。

えっちシーン試し読み
ここからスタート！

「まだ一番汚れている部分を綺麗にしてもらっていないわ。私の前に跪いて」
命ぜられること、従うことに段々と抵抗がなくなっていた。むしろ喜びに似た感情があったことにコルトはまだ気づいていない。
正面で膝をつく。互いに全裸のままで、少年の肉棒は狂おしく勃ちつくしていた。
項垂れたままの視界に、ベレッタが少し両足を開いたのが見えてくる。
「顔を御上げなさい」
鼓動を高鳴らせながら見上げると、そこに息づく牝の本体が迫っていた。
「ああ……」
むっちりとした太股の合間の奥。温かな湯が、そこからポタっと落ちてコルトの鼻先を濡らした。
一度終息しかけた興奮が一気に高みに押し上げられてしまう。
柔らかそうな肉が裂けている。その裂け目から、ぬらぬらと光沢した紅桃色をした粘膜が猥褻な歪みの形状で食み出していた。恥毛の幾つかがそこに濡れて張りつき、小さな真珠色の突起も見えた。
これが女だった。グロテスクで汚くて、なのにあらゆる芸術品を凌駕した美しき花弁。蕩けるような熱を発し、濃厚なチーズを煮詰めすぎたような牝部の匂いが降りてくる。
はあ、はあ、はあ、はあ……。魂の芯から興奮した息遣いを荒らげてしまっているようだ。

瞬きを忘れ凝視してしまい、興奮しつくして夢中で女陰臭を鼻腔に吸い込んでいた。硬直しどおしだった肉棒は痺れて、だらだらとカウパーを漏らし続ける。

「まあ、いい顔してるわ、コルト……。さあ、舐めて。飢えた犬のように、私のオマ〇コ、ペロペロ舐めて、綺麗にしてよ」

もう返事する声も出せず、震える舌を伸ばしていった。

ぐちょぐちょした卑猥な肉に迫る。股間の蒸れた熱気と芳香が濃くなって、

ふちゅ……っ。滑りを帯びた弾力を舌先が感じた。

「ん……っ。くすぐったい……」

甘ったるい声が聞こえてくる。

感動と激烈な興奮が溶け合って、頭の中から熱くなった。

女の汚らしい性器を舐めている。とても臭くて、ぬちゃぬちゃして、いやらしくて堪らず、だがとても美味しい。性の悦びに包まれ、ぺちゃぺちゃと舌を蠢かせながら、荒らげた生暖かい息を女陰に吐きかけ続けた。

「はあぁ……いいわ。もっと全体を……舐めて……」

唾液で湿らす前から、そこは湯でもなく、汗でもない別のぬるぬるの液体で濡れていたようだった。少ししょっぱくて舌に絡みついてくる。

ぺちょ、ぬちゅる、ぺちゃぺちゃ……。

粘膜と土手肌の境の隙間に舌先を潜り込ませ、丹念に削ぎ清めていく。
ベレッタはその様子を見下ろし、その瞳はとろんと心地よさそうに瞼を半分下ろしていた。熱い吐息を時折漏らし、たわわな乳房をゆっくりと上下に揺らしている。
とろっとした蜜がピンクの花弁の合わせ目から漏れてきた。その正体もよく知らぬまま、コルトは舌で掬い上げる。
（ああ、美味しい……。何時までも、もっと……）
ツンと可愛らしく突き伸びたワレメ上部にある肉芽。惹きつけられるように舌を這わせていく。
「んあ……っ、そ、そこは……優しく……」
包皮に添って転がすように舐めていくと、王女は自分で制御できないように身を跳ねさせて震えていった。
ぬちゅ……っ、くちゅくちゅ……。また肉ビラの合間から蜜が漏れてきて、少年の顎を湿らせていく。
もっと奥まで、全部綺麗にしてやるんだ。従順な演技ではなく、元々使命感などない。ただどうしようもなく自分がそうしたくてならなかった。
この女を殺そうと企んでいたことなど完全に忘れて、更に発情したような牝の匂いが濃くなると、もう我を忘れたようにむしゃぶりついた。

ちゅっ、ぢゅぷ、ぬちゃ、ぺちょぺちょ……。
生々しい肉花弁の感触を唇に含んで、ベロをワレメに潜り込ませていく。
「はあ、はあ……、い、いいわ、貴方の舌……、もっと食べて……」
ぐちゅる……。ビラビラの内側にはたっぷりと牝蜜が溜まり込んでいた。それが一気に少年の唇を塗れさせ、口内に雪崩れ込む。舌全体が彼女の発情液で濡れつくし、どんなに清めても、いっそう増すばかりだ。
頭が繊細そうなベレッタの両手で押さえられる。
微肉が顔にぐりぐりと押しつけられて、ぬちゃぬちゃと蜜が頬に垂れていった。
美麗な女王の股間に美少年の顔面が埋められ、もどかしそうに彼女の腰が幾度も振られる。
「うぷぅ……っ、ぷはあ、はあ……ぺちょぺちょ……」
唇を覆うように肉ビラがぱっくりと開き、蕩ける花弁に擦られると、顔は性感帯になって快感が湧き起こってくる。
濃厚な牝粘膜の香りに鼻腔を埋めつくされると、くらくらと思考がぼやけて牡の本能だけが脳を支配してきた。
「ァはぁあんっ！　ほら、も、もっと貴方の綺麗な顔で、ベレッタの……やらしくて汚いオマ〇コっ、拭いてぇぇっ！」

ぐちゅっ！　ぢゅぶぢゅぶぅ――っ！　主人の欲求に従い、自分の衝動に動かされるままに、理性を忘れて顔を狂い乱れさせる。

濡れた王女の陰毛が激しさに抜けて、コルトの頬に張りついた。

夢中で舌を蠢かせ、奥にあった二つの大きさの違う孔を交互に舐めていく。

（しょっぱくて、美味しい……。ハア、ハア、ああ、たまらない……。このままドロドロに溶けて……、あっ、ああっ！）

痺れていた肉棒が激しい痙攣を見せて、奥から強烈な欲求の爆発の予感が膨れ上がった。

「い……っ、いい……。コルトっ、も、もう少し……、ふぁっ、はあ……」

温かく柔らかな太股が少年の頬を挟み込んできた。鼻先にコリコリした肉芽を押し当て、グリグリときつく擦りつけてくる。

ビクッ！　ビクビクっ、と跳ねるベレッタの腰つき。

ブシャっと牝汁が飛沫をあげ、大量に少年の口内を満たす。息苦しさが未知の快感を目覚めさせて、震える唇の端からだらだらと蜜を零しながら、体の芯から悦楽が噴き上がる。

「ふぱあっ、あがっ、はあ……、来るぅううっ！　来る、来るぅううう！」

怒涛に押し寄せる。脳髄が甘く痺れて、堰が破られた。

ドピュルルルッッ！　ドブドブッ！

強すぎた刺激と興奮が、童貞少年にもたらした生理現象。

かに揺れる恥毛を撫でるようにして、はあ、と彼女は一つ甘ったるい吐息を吐いた。指先の動きに視線が誘導されて、コルトはのめり込むように見詰めてしまう。

ぐちゅっ、と蒸れた微肉が彼女自身の手によって左右に割り開かれた。

（ああ……っ、奥のドスケベな粘膜が、丸見え……。凄く、やらしい……）

肉厚の花弁の向こう側に溜まっていた大量の淫蜜が、どろっと滴り、そのまま少年の股間に向けて落ちていく。

「ずっと、貴方のおっきなチンポでお尻を刺激されていたから、ほら、こんなに下品になってしまってるわ」

ぬらぬらと露ダクに光沢して、縮れた毛が何本も牝本体に張りついている。包皮を剥いた肉芽は、浴場の時よりもあからさまに勃起していて、汗の混じった濃厚な秘粘膜の香りが放たれていた。

「俺は……どうすれば、いい……？」

興奮と戸惑いに考えが纏まらなくなってくる。

「コルトの好きにしていいのよ。嗅ぎたい？　舐めたい？　触っても、いいのよ」

「好きに……って言われても……」

暗殺者としても、リンガとしても、ずっと命令されるままに動いていた。自分の感情で動いたのは、きっとベレッタに刃が向けられたあの時が初めてだ。

（えっちシーン）試し読み
ここから
スタート！

「興味のままに……。それとも、こんなのは嫌？」
頭を横に振った。女の、ベレッタ王女の肉体に、してみたいことは幾らでもある。
「でも、何からしたらいいのか、分からないのね？」
今度は縦に振った。命令されれば何でもできるのに、今は本当にどうしていいのか分からない。自分は確かに歯車で動いているようなもので、リンガに向いていたのかもしれないと思った。
「じゃあ、教えてあげる。まずは、女を濡らすこと。でも、もうこんなに溢れてしまってるから、もうこんなに求めてしまってるから、そこは省くわ。コルト、よく見て……」
言われるまでもなく凝視している。ズボンの股間はパンパンに張って、きつく圧迫されているのに気持ちよくも思えた。
「ほら、ここ……、この小さなのが、おしっこの孔……」
示してくれる指先が直ぐに淫蜜に塗れていく。ゴクッと喉を鳴らして、少年は唾を飲み込んだ。
一度は舐めたそれをこんなにしっかりと見詰めるのは初めてで、以前はそれがどんな器官かも知らなかった。
「こっちの小さなオチンチンみたいなのが、クリトリス……。凄く、敏感なのよ」
宝石のように美しいそれも、とても卑猥に見えて、吸いつきたくなってしまう。

「で、これが……膣口。オチンチンを挿れるところ……。今、とっても寂しがってるみたい」
ヒクヒクと微かに開閉していた。自分の盛りきった肉棒を思い描き、その太さと目の前の卑窟の幅のアンバランスさに、彼女の言った言葉がにわかには信じられなかったが、そこから一つになりたいと強く願ってしまう。
「ねえ、指を……挿れてみる？」
「い、いいのか？」
全身の脂肪から濃厚な牝臭を滲み出している年上の女は、優しさと妖艶さを混ぜたような笑みを浮かべ、少年の手を取った。
誘われる。蕩けるような熱い、ベレッタの女自身に片手が近づけさせられると、当たり前のように人差し指を立てていた。
落ちてくる淫蜜に指先が濡らされながら、手首から先で降りてくる熱帯の湿度を感じる。
ぬぷ……っ！　蜜口を微かに減り込ませるように、指先が牝の中に忍び込んだ。
「ん……っ、はあ……」
膝を曲げながら腰を僅かに落とし、王女にあるまじき下品な開脚で、彼女はお尻を震わせる。
（ああ、温かい……。ぐちょぐちょしてて、ぷるぷるで、柔らかくて……）
第一関節までが蜜壷の中に納まった。そっと王女が手を離しても、少年は指先を潜り込

ませたままその感触を愉悦する。
「さ、さあ、今度は……貴方自身で、ハァ、ハァ、奥まで確かめて……」
強い興奮に少しだけ放心しながら頷き、指先を進行させていった。
ぐちゅっ！　ぬぷぷっ、ぢゅぷぢゅぷ……。蜜の滑りでどんどん人差し指は牝の内部に包まれていく。
「ふぁっ、ぅはぁあ……、いい……。とってもいいわ、コルトの指……」
内側のヒダヒダが顫動(せんどう)して擽ってくる。ぬちゃぬちゃした壁面が吸いついてきて、孔は時折ヒクついて締めつけてきた。
「うわぁ、女の中って、こんなに……」
気持ちよかった。指先が確かな性感帯になったようで、包み込まれる心地よさに酔ってしまいそうだ。
自分の指が女の生殖器に入り込んでいる。その興奮が牡の本能を呼び起こし、したいがままに抜き差しの動きをさせてしまう。
「ぁ……っ！　ああんっ！　ジンジンきちゃう……。私のここっ、何時の間に、こんな……」
両手を頭の後ろに組みながら、仰け反るような姿勢を見せる王女。脇の下が汗ばみ、たわわな巨乳が上下にぷるぷると震えた。
「はあ、はあ、なんてドスケベ……」

濡れきったワレメに、自分の指が突き刺ささったまま上下運動する光景が卑猥すぎて、少年の下着がカウパー塗れになっていく。

ぬちゅっ！　ぬぶっ、ぶぢゅぶぢゅっ！　悪戯に指を微かに曲げ、粘膜の感触を楽しんでいった。

そのつど、ベレッタの腰はくねくねと淫靡に踊り、彼女の唇から涎が漏れていく。

「いひいぃっ、はぁん……っ、あんっ、あんっ、そ、そうよ、とってもスケベなのよ、女のここって……。ねえ、指より、別の物、挿れたくなってきたでしょ？」

そっと少年の悪戯な手の動きを押さえ、王女はゆっくりと引き抜かせてきた。どろりと壷口から濃厚な蜜玉が落ちて、彼女は眉根を寄せてビクッとお尻を震わせる。

盛りきったような表情で腰を下ろしてくるベレッタ。牝汁でぐちょぐちょになった股間を開ききったまま、彼女の両手がコルトのズボンに伸びた。

「こ、こんなもの……入るのか？　ハアハア、ほ、本当に……」

ベルトが解かれ、ボタンが外され、下着と同時にズリ下ろされていく。

「子供ができる仕組みを知らないの？」

「そ、それくらい知ってるさ。で、でも……」

きつい圧迫から解放される肉棒が外気に晒された。膨れきった先端が淫水に塗れきっていて、赤い光沢色を見せている。凶悪そうに血管が茎に浮き上がり、ビクンと跳ねている

それは指などとは比べ物にならない太さと長さだ。
「ふふ、こんなに物欲しそうに震えて……。コルトはしたくないの？」
「……、し、したい……」
興味と期待と興奮、そして強烈な劣情が素直にさせていく。
（ああ、指でさえ、あんなに気持ちよかったのに、凄くやらしい光景だったのに……、もし、こんな俺の汚いのが王女の中に挿入ったら……）
白魚の指で滾った強張りが握り締められた。うっ、と低く唸りをあげる少年。その優しい包みの中で、肉棒が堪らず脈動を繰り返す。
「はあ、熱い……。嬉しそうよ、貴方のチンポ……。さあ、国一番のスケベな王女が、コルトに牝を教えてあげる」
少年の男性自身が垂直に立てられ、そこに蒸れきった女の鼠蹊部が落ちてきた。止め処なく滴り続ける淫蜜が接触よりも前に肉棒を濡らし、ぷるぷるした肉ビラの体温を過敏に感じる。これから起こり得る事態を思うだけで息遣いは乱れきって瞳は血走った。
「んっ、あん……っ」
ぬぷっ！　滑りきった桃色の花弁が肉棒の先端に押し開かれる。
（くあぁああっ！　ベレッタの、オ、オマ〇コに、俺のが当たって……。あったかい……。ぬちゃぬちゃして……）

亀頭を銜え込みだして、蕩ける肉ビラが吸いついてきた。溢れ出る牝汁が陰茎に伝って直ぐに根元まで濡らしてくる。
「ぁはっ、コルトのチンポっ、直接感じる……。股間のやらしい涎が止まんない」
「お、俺も、はあ、はあ、き、気持ち、いい……っ」
逆上せたような表情の王女が愛しそうに見詰めてくれる。そんな顔をされると、酷く甘えたくなってしまう。
ぢゅぷっ、ぬぷぷっ……っ！　むっちりした彼女の下半身が沈み込んできた。
「はっ、はぁ、あんっ……。コルトっ、分かる？　これが、女……。これが私よ」
「あああっ、凄いっ。ベレッタが、俺のを食べてる。ぐちょぐちょしたのが、やらしく噛んで……」
瞳を閉じて愉悦する王女。牝肉にどんどん肉棒が包まれて、初めての快感が局部に染み込んでくる。
自分と彼女の性器が繋がっていく光景が、更に興奮を高めていた。
ヒクつく壷口がゆっくりと根元まで到達していく。その頃には、二人の恥毛は淫蜜を吸いきって、濡れて絡み合っていた。
「いっ、いい……っ！　やっぱりコルトのチンポは、ぅはあ、ああんっ、特別……」
とても熱いベレッタの中。蜜壷の内側に無数にあるヒダヒダが顫動して肉棒を舐めまわ

してくる。奥は溢れかえっているのに、粘膜がきゅっと吸いついてきて、信じられないくらいに快感が膨張してきた。

「ベレッタっ、お、俺……っ、ああっ、でちゃうよ」

馬上から刺激され続けてきた肉棒は、初めての牝の感触と行為の歓喜にもう欲求が破裂しそうになってしまう。

「お尻の孔に力を込めるようにして、我慢するの。はあ、はあ……、まだ終わらせたく、ないでしょ？」

両手で草をきつく掴んで、噴出しそうなものを堪えた。王女の中で強張りは痙攣を繰り返し、刺激は絶えることなく続いていたが、ベレッタの期待に応えたくて切なさを忍んだ。

そんな必死な様子が伝わったのか、王女は赤らんだ顔で優しく微笑んでくれる。

「いい子ね、コルト……。女を満足させて、男は一人前よ。……じゃあ、腰を動かすわ」

ぬっぷ、ぬぷぬぷっ！　淫靡に熟したお尻が少年の腰の上で上下し始める。

「あっ、あっ、ダメだ……っ、き、気持ちよすぎっ！　うっ、くううっ」

ぐちゅぐちゅと股間から響いてくる猥音。自分の肉棒で減り込み、捲り上げを繰り返す膣口。ぬるぬるした感触に強張り全体がズリ擦られて、少しでも気を抜くと大量に噴出してしまいそうになった。

「コ、コルトも腰を動かすのっ。ああっ、美味しいわ、コルトのチンポぉおおっ！」

ベレッタも夢中になっている。一気に肉欲が解放されたように、動き始めてから刹那のうちにグラインドが最高速に達していく。

ぢゅぶっ！　ぶぢゅっ、ぬぶぶっ、ぐちゅぐちゅぐちゅぅ――っ！

少年の脳が甘く痺れつくしていった。泣きそうな激快楽の表情で、衝き動かされるままに両手で王女のお尻を掴む。柔らかな尻肉に五指を減り込ませ、下から肉棒を抉り込ませていった。

「くううっ！　こ、これで、いいっ、ベレッタぁっ……」

「そ、そうよ、コルト……っ、ヒっ、いいんっ！　腰が止まんないいいいっ！」

全身から汗を吹き出していく発情王女。淫乱すぎる苛烈なお尻の上下運動で、胸の肉果実がたぷんたぷんと大きく揺れる。

ベレッタの体中から淫靡な牝の香りが濃厚に放たれ、唾液の煙る口内を覗かせながら、青銀の髪を振り乱して彼女はアへり狂っていた。

「はあっ、ベレッタぁ……、王女様ぁああっ！　俺っ……」

両手を腰に回し直して、上半身を起こし、甘えるように彼女の胸の谷間に顔を埋める。両の頬が、質量のたっぷりある温かく柔らかな乳肉に擦られ、このまま一つに溶け合っていくような感覚に陥っていく。

「ああんっ！　か、可愛いわ、コルトっ！　さあ、も、もっと……、もっとチンポで私を

掻き回してぇっ！」

ぬぶぶっ――っ！　ぬっぷ、ぬっぷ、ぬぷっぬぷっっ！

結合部から牝汁が飛沫をあげる。破廉恥に貪り合って、王女のお尻が何度も少年の腰に叩きつけられた。

急速に二人は募ってくる。求め合いながら、互いに我が儘に昇りつめて、少年の肉棒に染み込んだ快感は臨界に達しようとしていた。そして彼女もまた、

「んっぁぁぁあっ！　オマ〇コ熱いのぉっ、くるぅうううっ！　狂おしくっ……、来ちゃうっ、来ちゃうぅうううっ！」

ベレッタの腕が彼女の豊乳に挟んだコルトの頭部を抱きしめる。汗蒸れた女肉の熱気に包まれ、生まれて初めて感じる安らぎと幸せが全身を駆け巡っていった。

（ふあああっ、王女様ぁ……っ、俺っ、貴女の為なら……）

絶頂へと向かう肉芯の震えを感じ、うねる快楽の本流に肉棒を猛り狂わせながら、暗殺者のリンガは、心から主人に忠誠を誓った。

「コルトっ、コルトぉっ！　私の物っ……私のチンポっ！　ぁ……っ、イっ……イク……ぅ、はああ――っ、オマ〇コっ、無茶苦茶に穿られてぇっ、イグぅうううっ！」

永遠に放さぬと宣言するように、肉壷がきつく強張りを締めつけた。

ぐぢゅっ！　ぬぶぶぶっっ！　抑えきれない牡と牝の腰振りが限界まで加速する。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/